

アートでひらく、 共生の未来

——社会課題と人をつなぐもの

インタビュー

伊藤達矢

「東京藝術大学社会連携センター副センター長／教授」

大谷みさ子 取材・執筆
逢坂聡 撮影



伊藤氏の研究室のある東京
芸術大学上野キャンパス。

「とびらプロジェクト」「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点」——東京藝術大学の伊藤達矢氏が手がけるアートプロジェクトは、社会に新たな視点と対話を生み出し、課題解決の糸口を提示してきた。SDGsや地域活性化といった文脈で文化芸術の可能性が再評価される今、伊藤氏は「アートは社会と人をつなぐ触媒」と語る。果たして、アートは私たちの生き方にどんな示唆を与え、社会をどう変えるのか？ 伊藤氏の活動を通して、その可能性をひもといていく。

JR上野駅公園口からほど近く、多くの人々で賑わう上野恩賜公園。不忍池を擁する豊かな自然の中に、美術館や博物館など9つの文化芸術施設が点在している。今回お話を伺った伊藤達矢氏が所属する東京藝術大学（以下、藝大）のキャンパスはこのエリアにある。敷地内には明治期に建てられた煉瓦造りの校舎や、巨大な二次元コードがデザインされたユニークな建物が並び、長い歴史と革新が共存する総合芸術大学の風格を漂わせている。

現在、社会連携センターの副センター長を務める伊藤氏の経歴は、藝大ひと筋だ。油画科へ入学し、大学院では美術教育研究室に所属。その後は先端芸術表現科で助教を務めるなど、アートの道を順調に歩んできたようにみえる。しかしその過程でやはり葛藤もあったそうだ。大きな転機となったのは大学院に入る時だった。

の内定を辞しての決断だったそうだ。

「きく力」でひらく、「共感」でつなぐ

「改めて自分のやりたいことは何だったのかと、深く考えました。専門性を持ってやっていくべきことは何だろう。アーティストの道に進む学生も多いため、私は、アートを介して人々が学び、実践できるような『場』をつくることに強い関心を持っていたので、その研究をしたいと、美術教育の研究室に進んだのです」と言うように、大学院時代はさまざまなアートプロジェクトの運営に携わった。

とびらは、最長3年間で卒業（プロジェクトでは開扉と呼んでいる）するが、第13期が加わった今年度は約130名が活動に参加しているそうだ。18歳以上で、活動方針に賛同する人であれば誰でも参加が可能で、実際に働き盛りの会社員やフリーランサー、学生や専業主婦、リタイア組の高齢者まで幅広い。その活動方法について伊藤氏は次のように語る。「たとえば、『この指とまれ／そこにいる人が全て式』という方法があります。とびらたちが美術館を拠点にして、今自分が課題だと思うことなどを周りの人と話し合う。そのなかから何かに取り組もうとなった時、これらのメンバーに向

て『自分と同じ課題に共鳴してくれる人はいますか？』と呼びかけるのです」。ここで3人以上が集まれば「とびラボ」というチームを作ることができ、メンバーで話し合っでできることを考えていくのだという。「その際に重要なのは『きく力』、つまり皆が互いに聞き合えるということ」と伊藤氏は語る。

確かに対話において「きく力」は、重要なキーワードだ。しかし、ここでいう「きく力」とは、単に相手に対して何か良いインタビューをするようなことではなく、「相手が話したかったことを、言葉の奥にある思いまでしっかり汲み取り、それを適切な言葉で表現できるよいうケアすること」だと言う。人は話したいと思っていることを、簡単に言葉にできていない。言葉を選んだり、つないだりしながら、自分が言いたいこととびったりと合う言

「改めて自分のやりたいことは何だったのかと、深く考えました。専門性を持ってやっていくべきことは何だろう。アーティストの道に進む学生も多いため、私は、アートを介して人々が学び、実践できるような『場』をつくることに強い関心を持っていたので、その研究をしたいと、美術教育の研究室に進んだのです」と言うように、大学院時代はさまざまなアートプロジェクトの運営に携わった。



上／とびらプロジェクトでは、アート・コミュニケータ（とびラー）が主体的に、人とのつながりを大切にしたい新しい対話の場づくりをしている。

下／「ベビーカートツアー」では、ベビーカーや荷物もとびラーがサポートし、親が赤ちゃんと一緒に作品を楽しむ機会をつくった。写真提供／とびらプロジェクト

葉を見つめる作業には、かなりのエネルギーを要するものだ。伊藤氏はこう続ける。「相手に伝わるように話すためには、聞いてくれる人の存在が大きい。聞いてくれる人がいると、話すエネルギーがチャージされてさらに話せるようになる。そんな状態は、聞いてくれる人が話している人をケアしてくれている、そこに存在することを可能にしてくれている、ということだと思います。」とびらプロジェクトにおける活動の中で伊藤氏が実例として挙げてくれたのは、あるお母さんとびらの話だ。その方は、子どもをベビーカーに乗せていた頃、周囲に迷惑をかけてしまうのではないかと、外出を控えてしまうことがあったという。しかし、ある時美術館から「あなたのままで、お子さんと一緒に来ていい」というメッセージを受け取り、救われた思いがしたそう。この経験から、そのお母さんとびらは、「世の中に迷惑をかけてしまうような存在だと感じる時もあったけれど、美術館に『おいで』と言ってもらえたように、今度は自分が、子育て中のお母さんたちを迎え入れる側になりたい」と、とびらの仲間自身に課題を共有した。そして、その思いに共感したほかのとびらたちと、美術館の学芸員が協力し、「ベビーカーツアー」の企画・実施へとつながったという。美術館と利用者がフラットな関係で話し、アイデアを出したからこそその事例だろう。

「とびらプロジェクト」に連動するかたちで上野いにとつて心地よい関係性を築いていけるのか。それを考えることは、とても大切です。そして、その『ケア』の実践に、『きく力』は欠かせない要素であり、日常生活のあらゆる場面で必要とされているのです」と、「きく力」の重要性を改めて強調する。

共生社会をつくる アートコミュニケーション共創拠点

「とびらプロジェクト」、「DOORプロジェクト」で実践を重ねてきた伊藤氏が、現在、中心となって推し進めているのが、2023年度から始まった10年間にわたる大型プロジェクト「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点（ART共創拠点）」だ。これは国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）「共創の場形成支援プログラム（CO-INEXT）」によって採択されたもので、藝大を中心とする産官学の42機関（2025年2月現在）が参加するプロジェクトとなっている。「SDGsの取り組みは2030年がひとつの区切りとされています。しかし、私たちが目指すべきなのは、その先にある、持続可能な社会の姿です。では、どのような社会の実現を目指すのか。現状を分析し、そこから逆算して、今からできる研究や社会実装を進めていく。それが、このプロジェクトのテーマです。よく、『藝大はアーティストを養成する大学』というイメージを持たれますが、本学のミッションには、『心豊かな活力ある社

公園内の9つの文化施設が参画する「Museum Start あいうえの」[*1]で、子どもたちの作品鑑賞のサポートをするアート・コミュニケーションとして活躍するとびらも少なくない。素直な子どもの視点を損なわず自由にその発想を展開させていくには、やはりここでもとびらによる「きく力」が大切になってくる。なお、とびらは基本的にボランティアな活動だが、月2日以上参加が条件であり、基礎講座と実践講座（3つの講座内容からの選択制）が受けられるなど、より専門的な知識を得られるといったメリットもあるそう。

アートでびらく「福祉」の新たな地平

さらに深く学びたい人への門扉として、藝大では2017年から、藝大生と社会人が一緒に学べる「Diversity on the Arts Project（通称『DOORプロジェクト』）」という履修証明プログラム[*2]も開講。これは「福祉×アート」をテーマに、「多様な人々が共生できる社会」を支える人材の育成と、コミュニティの醸成を目指すためのカリキュラム[*1]だ。

「一般的に『福祉』というと、介助や介護といった、高齢者や障がい者を対象とした活動がイメージされがちです。しかし、私が考える『福祉』とは、そうした活動だけを指すのではなく、人間は誰しも、多かれ少なかれ『生きにくさ』を抱えながら生きています。そ

会の形成を目指す』そして『芸術をもって社会に貢献する』という文言が明記されています。SDGsの17の項目に、『アート』という言葉は、直接的には書かれていません。しかし、私はSDGsを達成するためには、『アート』の力が不可欠だと考えています」。

ちなみに「NEXT SDGs」として可視化した日比野克彦学長が描いたマークには、花びらのように円形に並べられた17個の各色のゴール（真ん中）に、それぞれの色が絶妙なバランスで滲みあい、溶けあっている様子が見て取れる。「これは、アートの持つ『多様性を認め合う力』を視覚的に表現したものです。社会には、様々な課題が存在します。しかし、それらの課題は、個別に切り離されたものではなく、複雑に絡み合っている。どこからどこまでが黄色で、どこからどこまでが赤である、と明確に線引きすることなどできません。立場や視点の異なる人たちが、それぞれの感じ方や考え方を尊重し、認め合いながら、より良い社会のあり方を模索していかなければならない。そのために必要な



DOORプロジェクトでは、アートと福祉をさまざまな角度から考察し、実践する講座や実習を実施。60時間以上の受講で、履修証明を取得できる

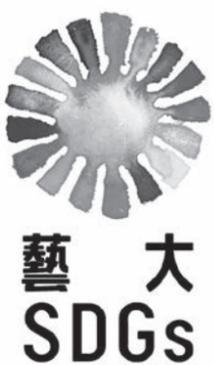
れでも、『あなたは、あなたのままでいい』と、その存在を丸ごと肯定し、互いの『生きにくさ』を認め合い、支え合えるような関係性、そして、そうした関係性を育むことができる環境、それこそが、私が考える『福祉』であり、『ケア』です」と伊藤氏は、「福祉」の本質を語る。さらに、「たとえば、体が不自由で、なかなか家から出られない高齢者がいるとします。そうした方が、社会と接点を持ち続けるためにはどうしたらいいのか。バリアをどう取り除いてあげられる、というのではなく、どうすればお互

『心の豊かさ』を育む力こそ、アートが持つ力の本質だと考えています」

「文化的処方」の可能性

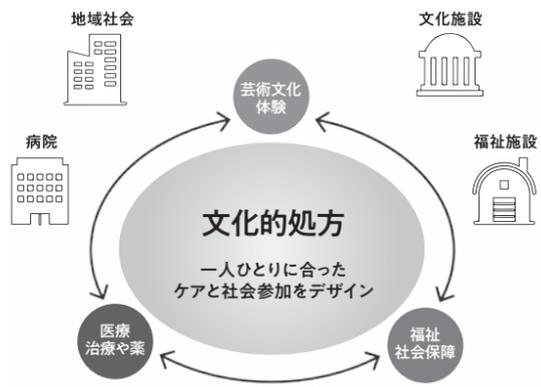
そして、伊藤氏は、SDGs 17のゴールが溶け合わない疎外要因について、前述したケアの考え方にも通じる、望まない孤独または孤立だということを挙げている。「2030年には3人に1人が65歳以上となる高齢社会。高齢者たちは退職したり体が衰えたりするなかで、孤独や孤立した状態になりやすくなっていく。さらにコロナ禍により、コミュニティが寸断されたまま、社会が止まってしまっているところもある。社会的な健康というか、人と人とのつながり方も以前より薄くなっているように思います。2024年に発足した『WHO社会的つながりに関する委員会』の共同議長を務める米国公衆衛生局長官のビベック・マシー博士によると、一人ひとりの身体に目を向けた場合、1日にタバコを15本吸うよりも、孤立していることが健康を損なわせるそうです。しかし、孤独や孤立は医療機関では治せません。社会の問題だから自治体に任せるといって、やはり難しいです。さらにテクノロジーで解決できるのかというところというわけにもいかないのです」

そうした課題に対し、伊藤氏は、まず社会的な総合知を育むプラットフォームをつくり、簡単に解決できない問題に対して考え続けていく



2030年までの国際目標であるSDGs以降の社会の姿を描いた「NEXT SDGs」のマーク。心を中心に捉えて17個のゴールの垣根を融かし、社会に総合知を創出するアートの力を表現している。

■ 図2：文化的処方イメージ図



アートと福祉・医療・テクノロジーを融合させ、多様な人々と社会とを結ぶアートを介したコミュニケーションを用いて、個人の生きがいや尊厳に直結し、人が人として生きるためウェルビーイングを高める。

「文化的処方」や「ART共創拠点」における
文化芸術の捉え方
他者との対話・共感へ

藤氏が「間主観」と表現する、多くの人の共感を呼ぶものが生まれることがある。
 「極めて個人的で主観的なものであるはずなのに、他者との共感を生み、感動を呼び起こす力が、アートにはあるのです。この力を使って社会的処方さらに1歩前に進めたもの、それが『文化的処方』(図2)です。アートと地域の取り組みとテクノロジー、これらを組み合わせ、その人がその人らしくいられる体験とか場所を、『文化的処方』として地域に浸透させることで、人が社会に参加するための新しい回路をつくることのできるのではないかと考えています」

「文化的処方」や「ART共創拠点」における
 アートの本質を捉え直すことは、現代において、ますます重要になっていく。AIの発展は、「人間とは何か」「人間にとっての豊かさとは何か」という根源的な問いを、私たちに突きつける。その時に必要となるのが、一人ひとりが、自分自身の内面と向き合い、自分なりのものの見方や感じ方、考え方を深めていくこと、そして、他者と共感し、つながっていくことだ。こ

うえで、自身で参加したいものを選んでもらい、次に文化リテラシーの聞き取りによって組み立てられた体験型のワークショップに参加。最終的には、本当に自分に合ったものを紹介してくれるソムリエのような個別的処方が受けられるようにしました。そして、それらに参加することで、自身のQOL(Quality of Life)がどのようになっているのかも知ることができるようになります。また、同じく岐阜県の高山市では、調査活動を行っている。「高山市では、自治体による健康診断が行われていて、約1万人の市民が参加しています。その方々に、自身が文化や芸術にどれだけ近いのか、体験しているかというアンケートを実施しました。任意ですが、それでも900名以上の方が答えてくれました。文化的な活動やお祭りなどの地域活動をしていることが、その方の社会的、精神的、肉体的な健康状態とどのように紐づいているのかを追跡調査しています。まだ2年目でデータ回収の段階なので詳細は明かせませんが、結果が出ていくところもあります。高山市との協議の上で長期的に続けていく予定です」と伊藤氏。

このような「ART共創拠点」によるアプローチには、藝大独自の「文化的処方」という考えが活用されている。これはイギリスなどで実装されている「社会的処方」を発展させた考えだ。社会的処方とは、患者の孤独や社会的な課題に対して、医薬品などで対処するのではなく、運動教室やサークル活動、ボランティア活動は、一見すると、いわゆる「芸術」とは異なるもののように思われるかもしれない。しかし、伊藤氏はこうした活動こそが本来の文化芸術の役割であり、むしろこれまで芸術の役割が狭義に捉えられすぎてきたのだという。

かつて芸術といえば、優れた技巧を持つアーティストの作品が評価されるものであり、大学でもその才能を育てることに注力し、それが先端だと認識されてきた。しかし、人の心がないところに物事は生まれない、人が作ったものは全てアートであると伊藤氏は語る。「アートを介して自分たちの存在を認め、いかに共感し合えるかが、これからの社会には必要だと思えます。世界と積極的に関わり、参加・対話のプロセスを通じて、人々の日常から既存の社会制度にいたるまで、何らかの変革をもたらす、いわゆるソーシヤリー・エンゲイジド・アートにも価値を見出されるようになりました。プロジェクトを創ること自体が自分の作品であるというように、アートを広く捉えることがスタンダードになってきているのです」

伊藤氏は「間主観」と表現する、多くの人の共感を呼ぶものが生まれることがある。
 「極めて個人的で主観的なものであるはずなのに、他者との共感を生み、感動を呼び起こす力が、アートにはあるのです。この力を使って社会的処方さらに1歩前に進めたもの、それが『文化的処方』(図2)です。アートと地域の取り組みとテクノロジー、これらを組み合わせ、その人がその人らしくいられる体験とか場所を、『文化的処方』として地域に浸透させることで、人が社会に参加するための新しい回路をつくることのできるのではないかと考えています」

活動内容は、まず岐阜県美術館でアート・コミュニケーションとして活動していた人たちに声をかけ、文化リテラシー「*4」育成講座でより専門的な知識を得てもらおう。そして、その文化リテラシーが、住民それぞれの趣味嗜好やどのような文化的体験がウェルビーイングを上げるのかなどを聞き取り、その人に合った体験などを提案していく。「この事例では、配布したパンフレットで具体的な活動内容を知った

高山市市民の健康状態、文化活動の状況などを
 お聞きするアンケート調査
 WEIBアンケート
 ご協力のお願い
 2024年2月初旬発送

「高山市、もっと元気に!プロジェクト」は、長期介入研究としてアンケート調査を継続して行い、健康診断データを含めた解析をしている。

伊藤達矢 (いとう たつや)
 東京藝術大学社会連携センター副センター長／教授。1975年生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科美術教育専攻博士課程修了(博士号取得)。専門は美術教育。東京都美術館、東京藝術大学のアート・コミュニティ形成事業「とびらプロジェクト」をはじめ、多様な文化プログラムの企画立案に携わる。2013年より「Museum Start あさくら」にも従事。現在、東京藝術大学が中核となる「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点」プロジェクトリーダーを務める。共著に『ケアとアートの教室』(左右社、2022年)、『美術館と大学と市民がつくるソーシヤルデザインプロジェクト』(青幻舎、2018年)など。

注
 *1 東京上野の9つのミュージアム(東京都美術館、東京藝術大学、上野の森美術館、恩賜上野動物園、国立科学博物館、国立国会図書館国際子ども図書館、国立西洋美術館、東京国立博物館、東京文化会館)が連携し、上野「文化の杜」を世界に誇る「学びの場」とするための事業。ミュージアムやアートをより楽しむための入り口となる「ラーニング・プログラム」を提供している。
 *2 社会人などを対象とした、体系的な知識・技術などの習得を目指す特別の課程(プログラム)。修了者には、学校教育法に基づく履修証明書が交付される。
 *3 国民一般の各種の文化活動を全国的規模で発表、共演、交流する場を提供することなどにより、文化活動への参加の意欲を喚起し、新しい芸術文化の創造を促すことを目的として、昭和61(1986)年度から、各都道府県の持ち回りで毎年開催されている国内最大の文化の祭典。
 *4 アートや文化芸術を用いて、人々が社会に参加できる機会をつくる専門人材。

動などへの参加を促し、心身の健康改善を目指すというものだ。しかし、伊藤氏は社会的処方だけでは足りないという。
 「人は他者とのつながりだけでなく、自分自身の心と向き合う時間も、とても大切なのだと思います。社会ともつながるし、自分の心とも向き合う時間がある、そういう行き来をすることが、アート体験ではよくあります。たとえば、ひとりで音楽を聴いて、その世界観に没頭する一方で、多くの聴衆と一緒に、演奏に酔いしれることもある。あるいは、友人と作品の感想を語り合うこともある、ひとり作品とじっくり向き合う時間を持つこともあるでしょう。こういった体験は、科学が客観性や再現性を重視して真実を証明しようとするのとは対照的に、アートが個人の主観を大切にすることこそ生まれます」

一人ひとりのものの見方や感じ方、考え方は極めて個人的な営みだが、その内面をとことんまで突き詰め、深めた先に、普遍的なもの、伊

うした「アートの思考」は、AI時代を生きる私たちにあって、不可欠なものとなるだろう。文化芸術の価値や定義は、今、人や地域・社会の中に根付き、育つ「場」や機会づくりそのものへと拡張されつつある。そして、今後さらに大切な役割を果たし、未来を担う大きな可能性を秘めている。

活動内容は、まず岐阜県美術館でアート・コミュニケーションとして活動していた人たちに声をかけ、文化リテラシー「*4」育成講座でより専門的な知識を得てもらおう。そして、その文化リテラシーが、住民それぞれの趣味嗜好やどのような文化的体験がウェルビーイングを上げるのかなどを聞き取り、その人に合った体験などを提案していく。「この事例では、配布したパンフレットで具体的な活動内容を知った

高山市市民の健康状態、文化活動の状況などを
 お聞きするアンケート調査
 WEIBアンケート
 ご協力のお願い
 2024年2月初旬発送

「高山市、もっと元気に!プロジェクト」は、長期介入研究としてアンケート調査を継続して行い、健康診断データを含めた解析をしている。